

日本中國學會報 第七十一集
二〇一九年十月十二日 發行 拔刷

中國書畫碑帖の日本流入に關する一考察

——收藏家・菊池惺堂を起點として——

下田章平

中國書畫碑帖の日本流入に關する一考察

——收藏家・菊池惺堂を起點として——

下田章平

はじめに

本稿は日中近現代書畫碑帖收藏史（以下、收藏史）の研究の一環として行ふものである。稿者は當該收藏史の構築を企圖し、明治維新から辛亥革命（清末）までの第一期、辛亥革命から第二次世界大戦終了時までの第二期、第二次世界大戦終了時から戦後復興期までの第三期、戦後復興期から文化大革命の時期までの第四期、文化大革命の時期から現在までの第五期に暫定的に區分した。

本稿では特に收藏史上劃期をなす第二期について検討する。この時期を劃期とみなすのは、清朝が崩壊し、財政的に困窮した清の帝室や高官に收藏されていた書畫碑帖が、中國國內の市場だけでは吸収することができずに、大規模に日本や歐米に流出し、岡倉天心（二八六三—一九一三）によるボストン美術館の中國コレクションの収集が行われ、日本の關西を中心とする中國書畫碑帖の大コレクションが成立した時期だからである¹⁾。

第二期の收藏史に關する先行研究としては、『富田昇『流轉清朝秘寶』（日本放送出版協會、二〇〇二）を嚆矢として、陶徳民編『内藤湖南

と清朝書畫——關西大學圖書館内藤文庫所藏品集——』（關西大學出版部、二〇〇九）、關西中國書畫コレクション研究會編『國際シンポジウム報告書 關西中國書畫コレクションの過去と未來』（同會、二〇二二）、曾布川寛監修、關西中國書畫コレクション研究會編『中國書畫探訪 關西の收藏家とその名品』（二玄社、二〇二一）、陶徳民編『大正癸丑蘭亭會への懷古と繼承——關西大學圖書館内藤文庫所藏品を中心に——』（關西大學出版部、二〇一三）などがすでに備わっている。しかしながら、これらの先行研究では個別の收藏家の動向の確認や、收藏動向を概括的に論及したものが大半を占めており、いまだに當該研究はその初期段階にあるといえる。

菊池惺堂（一八六七—一九三五）もこの時期に活動した著名な書畫碑帖收藏家の一人である。本名は晉二（晉は略稱）、大正九年に家督を相続してからは長四郎を襲名した。室名は味燈書屋、是空庵、蘊眞堂、屋號は佐野屋、惺堂の號で廣く知られ、實業家、政治家、南畫家、藏書家としても活動した人物である²⁾。内藤湖南（虎次郎、一八六六—一九三四）は『董龔藏書畫譜』（博文堂、一九二八）の序文において、

……在東京山本二峰・菊池惺堂君「菊池氏之藏、多燬於癸亥之災、

可惜」。在京攝間、上野有竹・小川簡齋二君、已故。而繼之者、齋藤重盒・阿部筌洲・藤井靄々諸君。是以近時唐宋劇迹之富、殆軼於本國焉。

(……東京に山本二峰・菊池惺堂君「菊池氏の藏、多く癸亥の災に燬かるるは、惜しむ可し」在り。京攝の間に、上野有竹・小川簡齋二君在るも、已に故す。而して之を繼ぐ者、齋藤重盒・阿部筌洲・藤井靄々諸君なり。是を以て近時唐宋劇迹の富、殆ど本國に軼ぐ。)

と述べるように、惺堂を山本二峰(佛二郎、一八七〇—一九三七)と並び東京の著名な收藏家であつたと見る。また、脚注において大正二年(一九一三)の「癸亥之災」(關東大震災)で惺堂の收藏品の多くが灰燼に歸したことも記している。こうした事情のためか、惺堂は蘇軾「黃州寒食詩卷」(國立故宮博物院藏)、李氏「瀟湘臥遊圖卷」(國寶、東京國立博物館藏)、渡邊華山「于公高門圖」(重要文化財、株式會社AMG藏)、「定武本蘭亭序」(木雞室藏)といった優品を收藏した著名な收藏家にも関わらず、これまでほとんど回顧されることはなかつた。

稿者は平成二五年以來惺堂のご遺族の協力を得ながらその收藏活動の考察を進める中で、惺堂は他の收藏家とは異なり、極めて重要な收藏家であると考えようになつた。つまり、第二期の收藏に深く関わつていた二大「收藏集團」(後述)に兩屬し、かつ他の收藏家には見られない日記などの一次資料が残されているからである。そこで、本稿では惺堂を起點として、これまでほとんど議論のなされることになつた、第二期に中國書畫碑帖が日本へ流入し、いかにしてコレクションが形成されたのかという點について検討したい。このことにより、日本が中國から流入した中國書畫碑帖の一大集積地となつた要因の解明に寄與することが期待される。

検討にあつては、第一章では第二期の收藏に深く関わつた「收藏集團」について定義をした上で、「書苑を中心とする收藏集團」、第二章では「犬養木堂を中心とする收藏集團」について取り上げ、惺堂の收藏活動を通じて、兩收藏集團がいつ形成され、いつ消滅し、どのような特徴を持つていたのかについて明らかにしたい。つづいて、第三章で「書苑を中心とする收藏集團」から「犬養木堂を中心とする收藏集團」へという二大收藏集團の變遷を惺堂の收藏活動によつて跡付かけ、どのようにして關西の中國書畫碑帖コレクションが形成されたのかを論じたい。なお、本稿では人名は通稱を用い、「」には脚注、「〔〕」には稿者が補足した語句を記し、引用文献のふりがなや傍點は省略し、變體假名などが用いられている場合はふりがなで示した。

一 書苑を中心とする收藏集團

曾布川寛氏は「關西中國書畫コレクションへの誘い」(上掲『中國書畫探訪關西の收藏家とその名品』、四一八頁)の中で、學者・收集家・業者の理想的な連携によつて關西の中國書畫碑帖コレクションが形成されたと見る。氏の見解を敷衍すれば、一定規模の優れた中國書畫碑帖コレクションを形成するためには「賞鑑家」「收藏家」「業者」からなる「收藏集團」が必要であり、この集團内で緊密な連携が取れていなければならなかつたといえる。特に中國から大規模に書畫碑帖が流入した、第二期の中國書畫碑帖コレクションの形成過程を解明するには、個々の收藏家の検討も必要であるが、それ以上にまずはこの「收藏集團」を把握することが必要がある。

ここで、「賞鑑家」「收藏家」「業者」について具體的に見ておきたい。第一の「賞鑑家」とは中國書畫碑帖に對する廣範で専門的な知識

を持ち、作品の眞贋の鑑定や鑑賞を行った人物であり、時に收藏家を兼ねる場合もあった。上掲の富田氏の論考によれば、骨董商の山中定次郎（一八六六一—一九三六）は民國初年に恭親王コレクションを一括して購入したことで著名であるが、書畫類は除外されていたという。このことは書畫碑帖が文物の賣買價格の中でも高額であったこと、特に日本では中國繪畫に關して古渡とは異質な「新渡」を評價することが困難であったことが要因であろう。ゆえに、中國事情に精通した東洋史の學者、あるいは中國に滞在し、書畫碑帖の鑑識眼を磨いた人物が賞鑑家の役割を擔つたと見られる。第二の「收藏家」には中國書畫碑帖に對する趣味や造詣の深さが求められる一方で、何よりも潤澤な資金力がある素封家や實業家などが想定される。特に中國の書畫碑帖が大規模に日本へ流入した大正年間には第一次世界大戦による好景氣が幸いし、實業家を中心に收集熱を掻き立てていた。第三の「業者」には「仲買人」（ブローカー）も含まれる。業者の役割としては、賞鑑家や收藏家の間を連絡調整し、鑑定・販賣・展覽・刊行などの諸業務を行い、收藏集團の事務局としての機能も擔つていたことが考えられる。

まずは「書苑を中心とする收藏集團」について考察しておこう。

『書苑』（後繼誌『書畫苑』）は法書會という會員組織を母體として、明治四四年に發刊された日本初の書の専門誌であり、この收藏集團は中國書畫碑帖に精通した『書苑』編集者の黒木欽堂（一八六六一—一九二三）や滑川澹如（一八六八—一九三六）を中心に形成されたものである。この集團は『書苑』を母體にしており、その活動時期も『書苑』（後繼誌『書畫苑』）の發刊から終刊まで、すなわち明治四四年から大正九年頃までと見ることができるといえる。

ここで惺堂とこの收藏集團との關わりを見ておきたい。「東京名流書畫骨董愛好家の種類調べ（其二）」に、

……因みに氏（菊池經政、先代長四郎）の養子晉二（惺堂）氏は、先頃書家にして又支那物の鑒識に於て當代第一の權威たる滑川澹如氏の周旋によつて、元の四大家たる倪雲林、黃一峰の二家の大幅を手に入れた。其の稀代の名品たる事は言ふを俟たぬ。

とあるように、惺堂は澹如と懇意にしており、その周旋によつて元の倪瓚と黃公望の大幅を入手したことがわかる。また、滑川澹如「王叔明雅宜山齋圖」の解説に、

……此の圖元と吳中に在りて有名なる藏幅の有たりしを羅叔言（振玉）之を物色し、將に購收せむとせし時偶然にも此の蹟を觀るを得たりしかば、迫りて愛を割かしめ自家の收奔に歸したるものなりとて其の授受を明にせり、予も亦一見垂涎に堪へざるも、奈何せむ非（非）力の寒生遂に之を菊池氏濫（濫）眞堂の寶庫に納入せり。

と見える。澹如が王蒙「雅宜山齋圖」を惺堂に納入していることから、彼が賞鑑家と仲買人を兼ねていた存在であったと見られる。

また、澹如は大正八年から同九年にかけて發生した「ナメタツ事件」（「六萬圓事件」とも稱す）を起こしている。「ナメタツ」とは滑川達（本名）に由來する。當時の『讀賣新聞』の記事を中心に整理すると、義和團事件の折に清内府から流出した李氏「瀟湘臥遊圖卷」は日本へ渡つて竹田貞吉が祕藏し、後に彼は山澤卯三郎を介して書畫商である川崎音吉（屋號は大和屋）に賣却先を依頼した。大正八年一二月中旬、川崎は澹如に鑑定と一萬圓で賣却先を探すように依頼したところ、澹如は五千圓で川崎から引き取つたという。翌年三月、澹如が

舊知の仲であつた惺堂に六萬二千圓で賣却したことが久松警察署に發覺し、この時に川崎へ五千圓を支拂つた。その後、竹田が川崎を相手取り横領罪の訴えを検事局に提出したことで事件化した。同年一月一日、澹如が竹田に一萬二千圓、以前に支拂つた一萬圓と合わせて、計二萬二千圓を支拂つて示談となり解決したというものである。

ちなみに、渦中の惺堂はこの畫卷の購入金額に對して、
高いとも思はねば決して安すぎもしない

と述べたという。大正一五年の段階で蘇軾「黃州寒食詩卷」(惺堂藏)と合わせて時價三〇萬圓と評價されていることから、このような發言に至つたのであろう。一方、澹如は、

一部の漢詩人の中傷や取るに足らぬ小雜誌の誣言など自分は意に介してゐないし辨駁の要も認めない菊池君が自分の恩人なのに仇で返した等とは以ての外である自己の鑑識に依る名品を知己に賣却し四萬圓儲けたからとて一點の疚しさを感ぜない
と破顔哄笑したという。

しかしながら、この事件によつて、惺堂と澹如の關係は疎遠になる。『菊池惺堂日記』昭和四年一月二十八日の條に、

廿八日晴 午前山田二行共ニ紅葉館二行 笹川喜三郎ニ招カレ 陸探徴(徴) 其外ノ支那ノ古畫ヲ觀ル 犬養木堂 杉溪六橋 榊原鐵 硯滑川澹如 博文堂老人等同席ス 滑川多年事故アリテ交際ヲ斷チ 居リシヨリ 今回山田 榊原 笹川諸子ノ心配ニテ謝罪スルトノコト ナルガ 余ハ固ヨリ心ニ懸ケザルコトナレバ承諾シテ今日同席シタルナリ

とある。日記に見える「多年事故」とは「ナメタツ事件」のことを指しており、この記載によつて、昭和四年まで惺堂は澹如と交流を斷つ

ていたことがわかる。しかしそれだけに止まらず、樂天先生「藝苑笑府」(『書道及畫道』第六卷一號)によると、澹如は名譽會員として活動していた漢詩團體の隨鸚吟社、大村西崖中心の文人畫團體である又玄畫社、惺堂らが中心となつて結成された書畫團體の遊戯三味會からも除名され社會的地位を奪われている。

一方、欽堂と惺堂の關係は、黒木安雄(欽堂)「本誌掲載の印影に就きて」(『解説』、『書苑』創刊號所載、頁數未掲載)によると、

……文友菊池惺堂の家に印譜を藏すること頗富む。又古刻印章を收拾するを娛む。今や書苑の發刊に臨み、其の家に就きて印譜を示さんことを求む。

と記されるように、惺堂は欽堂の要請に應じて印譜を同誌に提供している。またその後も惺堂はコレクションを『書苑』に提供し、欽堂がその解説を書くこともあつたが、欽堂には澹如のような仲買人としての活動は見られない。ただし、樂天先生「藝苑笑府」に、

▲ナメタツ事件に繼いで、クロキン事件が勃發した、コレも又玄畫社の所謂の第一流文人の一人、黒木欽堂(安雄)であるが、彼の贋書畫詐欺事件の連累嫌疑者として、検事局に召喚され御目玉を頂戴したる末、自今十ヶ年間乃木將軍の書幅のみならず、他一切の書畫の箱書を謹慎(禁止)するならば、其間起訴を差控ふべしと、検事の厚き御情けに預つて、引下つたは十月二十九日のこと、聞く、由來箱書は博識精鑿なる學者の一特權ともいふべきものである。欽堂が自分の精鑿を明判官の前に検事と争ふの勇氣なく、オメタツと謹慎を誓つて引下がつたものとすれば、如何はしき箱書をやつたに相違ない。安雄も今更ながら乃木將軍の遺靈の凜として生けるが如きに戰慄したと見ゆ。

とあるように、「ナメタツ事件」の直後に欽堂自身も「クロキン事件」(大正九年)を起こしている。この記事によって欽堂は乃木希典などの箱書(鑑定)によって利益を得ていたと見られる。なお、ここには記されていないが、例えば大正八年に收藏家の林朗庵(熊光、一八九七―一九七二)が文求堂を通じて一萬五千金で購入した黄庭堅「王史二氏墓誌銘稿卷」(東京國立博物館蔵)に跋文を記しており、欽堂は中國書畫碑帖の鑑定も行っていたことがわかっている。

以上の検討によって、「書苑を中心とする收藏集團」の形成と消滅、その特徴について見ておきたい。まずこの收藏集團は『書苑』が刊行された明治四四年に形成され、その後雑誌『書畫苑』が終刊する大正九年頃まで存在していたと見ることが出来る。この集團が消滅した背景には「ナメタツ事件」(大正八年―九年)と「クロキン事件」(大正九年)があると考えられ、『書畫苑』の終刊と軌を一にしていることによっても明白である。なお、欽堂はその後大正一二年八月三一日に講演で訪れた富山縣高岡の地で突然倒れて没し、澹如は關東大震災での罹災によって困窮し、村井吉兵衛(一八六四―一九二六)や田中光顯(一八四三―一九四三)の庇護を受けて書家として活動し、收藏活動とは距離を置くことになる^②。

つづいて、この收藏集團は、澹如の例によっても明らかのように、書畫碑帖の鑑定、價格の決定、賣却に至るまで一人で行っていたこと、すなわち、業者が介在せずに賞鑑家と業者(仲買人)が一體となっていた點に特徴がある。一方の欽堂は賞鑑家としての活動しか確認できなかったが、業者が存在しない以上、箱書などによる「鑑定料」の決定、その授受は自ら行っていたと推察されるため澹如と同じ状況であったといえる。そして、業者を置かなかつた結果として、「ナメ

タツ事件」や「クロキン事件」が生じて「書苑を中心とする收藏集團」が消滅したと見られる。

二 犬養木堂を中心とする收藏集團

「犬養木堂を中心とする收藏集團」は上掲曾布川寛氏論考で挙げられた人物をもとに整理すると、賞鑑家に羅振玉(一八六六―一九四〇)・長尾雨山(甲、一八六四―一九四二)・湖南、收藏家に惺堂・二峰・阿部房次郎(荏州、一八六八―一九三七)・小川爲次郎(簡齋、一八五二―一九二六)・上野理一(有竹齋、一八四八―一九一九)・二代目黒川幸七(一八七一―一九三八)・四代目藤井善助(一八七三―一九四三)、業者に博文堂(主人は原田庄左衛門〔大觀〕、一八五五―一九三八)を据え、全體を統括していたのが犬養木堂(一八五五―一九三二)であつたと考えられる。竹浪遠「犬養木堂」(上掲『中國書畫探訪關西の收藏家とその名品』、一二頁)に、

木堂自身は、政治資金や他者への援助の必要から、收藏は多くなかつたが、續々と流入する中國書畫を、親交のある政財界の同好の士へ斡旋し保全を圖つた。

と指摘する。竹浪氏の指摘のように木堂が直接斡旋した場合も見られるが、博文堂を介して行う場合の方が多かつたようである。『木堂翰墨談』(博文堂合資會社、一九二六)刊行以後、木堂の賞鑑家としての聲價は高まり、來日した中國人收藏家は、まずは木堂の鑑定を受けるのが常となつていたからである。このように、木堂は日本に流入する中國書畫碑帖の情報をいち早く得て、多くの場合博文堂を介して當該收藏集團の收藏家に斡旋したり、賞鑑家に鑑定を依頼したりしている。ゆえに、木堂はこの收藏集團を實質的に統括していたと見なすことが

できよう。この收藏集團の形成と消滅に關しては、博文堂の中國書畫碑帖の影印刊行の狀況とほぼ軌を一にしている。すなわち、菅野智明氏が指摘するように、博文堂の影印出版には中國書畫碑帖の保護や傳承を行うといった目的も有しており、收藏と影印出版物の刊行に深い相關關係が見られるからである。よつて、中國から將來された『北宋拓聖教序』（上野理一藏）をはじめて博文堂が影印刊行した明治四四年四月頃がこの收藏集團の形成の上限と見られる。それについては、鶴田武良「原田悟朗氏聞書 大正―昭和初期における中國畫コレクションの成立」¹⁵に、

中國で（辛亥）革命が起つたことを聞いてからしばらくして、靴の博文堂の店に中國から大きな荷物が何んの前觸れもなしに次々に送られて來ました。……清朝が革命で倒れて、ちょうど日本のご一新のときと同じように、内府の高官が扶持がなくなつて生活に困るようになりました。そこで取あえず所藏の美術品を賣ろうとして東京の道具屋に相談したがどうも不親切なので、中國通として知られた京都大學の内藤湖南先生のところへ適當な人を紹介してほしいと頼んできた。一方、外務省へも同じことを頼んできて、外務省はそれを犬養木堂先生に相談した。そのお二人が同じように父（原田庄左衛門）を推薦したものですから、中國では安心してどんだん品物を送つてきた、とそういうわけだったのです。

と記される博文堂主人の原田悟朗（庄左衛門の五男、一八九三―一九八〇）の證言ともほぼ一致しており、的を射ている。また、消滅に關しては、收藏集團の核となる木堂が昭和七年、湖南が昭和九年に相次いで他界し、昭和七年八月に博文堂は最後の影印刊行物として『唐閣立

本畫古帝王圖卷』（ポストン美術館藏）を出版している。その後博文堂は阿部の收藏目錄である『爽籟館欣賞』の解説を昭和一四年一月出版して以後、收藏關連書籍の刊行を行つていない。よつて、この收藏集團は少なくとも昭和一四年前後に消滅したものと考えられる。

この收藏集團の要となるのは業者の博文堂の活動である。惺堂との關わりを通じて、博文堂がこの收藏集團において果たした役割について「幹旋」「鑑定」「展覽會の開催」の觀點から分析してみたい。なお、以下で「博文堂」と言う場合は博文堂主人（原田庄左衛門・悟朗父子）と社員の小島甫らの總稱として用いることにする。

（一）幹旋

『菊池惺堂日記』を見ると、惺堂の自宅や旅先に關わらず、主人の原田庄左衛門（後に悟朗）や特に社員の小島甫がかなりの頻度で通つていたことがわかる。特に『菊池惺堂日記』昭和六年二月一五日の條に、

……小島甫來ル 懷素ノ苦筍帖ヲ持參ス 珍品ナリ 其外房ノ山
〔房山、高克恭〕ノ山水卷 藍田叔〔藍瑛〕八大人〔朱耷〕卷 皆名
品ナリ

と見えるように、小島は惺堂の避寒先の湯河原（同年二月六日から一九日まで滞在）まで出向き、收藏品の幹旋を行つてゐる。このことから考えると、惺堂と博文堂は日頃より連絡を取り合つていた關係であつたといえる。

また、博文堂は「松茂山莊」¹⁶（現在の兵庫縣川西市花屋敷に所在）という博文堂主人の別荘に惺堂らを招き、手元にあつた書畫骨董を展覽・幹旋している。「書畫帖」（個人藏）は「松茂山莊」を利用した來客が記したものであり、縦一七・五センチ、横一二センチ、計二〇開のう

ち一三開に記されている。この別荘は「書畫帖」の紀年によつて大正八年六月から昭和三年五月までは少なくとも使用されていたことがわかる。「書畫帖」に記された人物は①犬養木堂（大正八年六月二日）、②榊原鐵硯（同八年六月）、③阪正臣（同九年二月二四日）、④同上（同九年初巻）、⑤津田白印（一八六二—一九四六、無紀年だが慧雲の題記により前田と同日）、⑥前田慧雲（一八五五—一九三〇、同一〇年九月一九日）、⑦田邊碧堂（一八六五—一九三一、同一一年一〇月二六日）、⑧惺堂（同一一年一二月）、⑨大橋廉堂（一八九七—一九五二、同一二年二月）、⑩吳天民（生没年不詳、同一二年夏）、⑪同上（無紀年）、⑫二峰（昭和三年五月）、⑬尾上柴舟（八郎、一八七六—一九五七、無紀年）であり、博文堂による展覽・斡旋の様子は惺堂の南畫に描かれている。その畫賛に、

壬戌建子月、遊于松茂園別館。玩古圖。惺堂居士。

（壬戌建子月、松茂園別館に遊ぶ。玩古圖。惺堂居士。）

と記されるように、まさに書畫骨董の鑑賞を題材とした南畫である。そこには、額や畫軸が掛けられ、立像や盆栽が置かれた、大きな窓のある「松茂園」（松茂山莊を指す）の別館の一室で、書物などが載せられた大きな机を圍み三人が椅子に腰掛け、和服を着た一人が額や畫軸に向かつて解説している様子が描かれている。

このように、博文堂と惺堂は日頃より連絡を密に取り合い、自宅や旅先に關わらず收藏品を斡旋し、時に別荘の「松茂山莊」に招待して書畫骨董を展覽・斡旋していたことが明らかとなった。

（二）鑑定

惺堂は自身の收藏した「十七帖」（王羲之の書簡を刻した法帖）に湖南の鑑定を求めているが、この時に博文堂が介在している。「十七帖」に關しては『菊池惺堂日記』昭和六年三月一六—一七日の條に、

・（二六日）……光畑十七帖ヲ持參シ來ル。

・（一七日）……午前本郷銀行ヨリ黒門町銀行ニ廻ル。午後光畑來と記されている。昭和六年三月一六日に惺堂は「光畑」の持參した「十七帖」を過眼し、翌日には銀行から預金を引き出して購入している。「光畑」とは光畑六郎のことであり、東京市京橋區寶町一ノ八に店舗を構えていた骨董商である。滑川澹如とも交友が深かった人物であり、昭和一三年には「澹如先生遺墨展覽會記念出版刊行會」を立ち上げ、『禾魚艸堂李蘇詩帖』を刊行した。惺堂は恐らく澹如の縁で光畑とも面識を得たのであろう。なお、『菊池惺堂日記』昭和四年八月四日の條にも、

……光畑來陳白沙ノ書幅ヲ持參ス。

とあり、光畑は惺堂に時々コレクションを斡旋している。『菊池惺堂日記』昭和六年五月二六日—二八日の條を見ると、

・（二六日）……博文堂ヨリ電報ニテ湖南先生ヲ廿八日訪問ナスベシ

ト云ヒ來ル

・（二七日）……十一時過京都會直チニ三本木ニ行博文堂老人來明

日ノ打合セヲナス

・（二八日）……午前十一時奈良行ニ博文堂慧一郎ト發シ……湖南

先生山莊（恭仁山莊）ヲ訪フ十七帖ノ件ニテ種々異見ヲ聽ク

とあり、惺堂が湖南に宛てた鑑定の禮狀（昭和六年六月三日、關西大學圖書館藏）には、

拜啓過日ハ御靜閑を妨げ候處種々御厚意を蒙り難有奉拜謝候

猶汚貴覽候十七帖二つき御異見御示教被下一々御尤も二拜承仕り

候 猶十分研究可仕猶宜敷御教諭奉願候

と記されている。これらの資料によつて、湖南による惺堂藏「十七

帖」鑑定の経緯を確認すると、博文堂が湖南と相談して五月二八日に鑑定日を設定し、二七日に三本木（京都）在住の長男・慧一郎（一九五―一九四五）の寓居で博文堂と打ち合わせをした。二八日の鑑定當日、惺堂は博文堂・慧一郎とともに湖南の鑑定を受け、翌月三日に禮状を出している。このように、惺堂蔵「十七帖」鑑定の依頼から實際の鑑定までのやり取りは「收藏家」の惺堂と「賞鑑家」の湖南が直接行わずに、博文堂の介在で連絡を取り合っていたことが判明した。

なお、博文堂は惺堂コレクションの刊行も擔っている。『寒食帖』（大正一三年五月一三日發行、博文堂合資會社、卷子本、國立國會圖書館藏）と『李公麟瀟湘臥遊圖』（大正一二年三月三〇日發行、博文堂合資會社、卷子本、大阪府立中之島圖書館・國立國會圖書館藏）である。ともに湖南の「甲子（大正一三年）四月」跋を付しているが、「十七帖」の鑑定と同じく、これらの題跋の依頼に際しても博文堂が介在していた可能性が高い。

(三) 展覽會の開催

收藏とは直接関係がないが、「犬養木堂を中心とする收藏集團」に關わる人物の展覽會、すなわち「鐵硯先生書畫展覽會」（昭和五年）、「羊石遺墨展覽會」「大橋廉堂先生入蜀畫會」（ともに昭和六年）にも博文堂が介在している。「鐵硯先生書畫展覽會」は、昭和五年一月下旬に晚翠軒で行われた榊原鐵硯（浩逸、一八五五―一九三七）の展覽會である。鐵硯は木堂と慶應義塾以來の親友であり、書畫や刀劍の收藏家として知られる。『菊池惺堂日記』昭和五年二月一〇―一一日の條に、

・（二〇日）……午前原田來明日鐵硯老ノ招キニテ中華第一樓へ會合ノ由通知シ來ル

・（二一日）……中華第一樓ニ行鐵硯（硯）老ノ招待ニテ犬養木堂山本二峰 内藤湖南滑川達 博文堂 林文昭等ニテ一夕ノ清談盛興多シ。

とあるように、一〇日に博文堂の通知を受けた惺堂は、翌日中華第一樓の會食に参加している。會食のメンバーである木堂・二峰・湖南・澹如は、榊原浩逸編『鐵硯道人書畫冊』（博文堂、一九三〇）に題跋を寄せた人物と共通しており、展覽會開催の主要メンバーと見ることができよう。よつて、この展覽會では、圖録の刊行や會食の手配を博文堂が擔っていたと見ることができよう。「羊石遺墨展覽會」は南畫家・彫刻家として知られる内海羊石（一八四七―一九三〇）の遺墨展として昭和七年五月に開催され、ほぼ同時期に鷲尾義直編『内海羊石翁小傳』（博文堂、一九三二）が刊行された。

『菊池惺堂日記』昭和六年一月一八日の條に、

……午後博文堂老人鷲尾義直ト共（二）來リ羊石老人ノ事ニツキ種々相談アリ。

と記されるように、木堂の實質的に祕書の役割を擔っていた鷲尾義直（温軒、一八八七―一九五五）が木堂の名代として博文堂とともに惺堂のもとを訪れて相談している。相談内容については日記に明示されていないものの、展覽會が交詢社の文墨洞ギャラリーで開催されたことを考えると、その會場の手配を木堂が鷲尾や博文堂を通じて惺堂に相談したと見られる。交詢社は明治一三年に福澤諭吉の首唱のもとに結成された日本最古の社交クラブであり、慶應義塾出身の木堂も創設當初から同社の雑誌の編輯に携わっており關係が深く、そこに開設されたばかりの文墨洞ギャラリーで遺墨展を開催したいと考えたのであろう。そのため、文墨洞店主の中村長安は惺堂の祕書的な役割を擔つ

ていたこともあり、木堂が鷺尾や博文堂を介して惺堂に相談させたものと見られる。ちなみに、『菊池惺堂日記』によると文墨洞は中村の経営する書道用品店であり、昭和七年二月二日より交詢社二階に移転し、ギャラリーを併設して開業している。また、中村は惺堂らが主宰する遊戯三味會の事務局も兼ねており、惺堂との關係が非常に深かったことが窺われる。よって、この展覽會では博文堂と鷺尾が惺堂と木堂の間に入り會場を手配したこと、時を同じくして『内海羊石翁小傳』を刊行したことがわかる。

「大橋廉堂先生入蜀畫會」は、「大橋廉堂先生入蜀畫會趣意」（『大橋廉堂先生入蜀畫會』、刊行年不明）によると、昭和六年五月九日、一〇日の二日間にわたり東京美術俱樂部で開催された、廉堂の四川での寫生旅行を記念して開催された南畫展である。廉堂は惺堂の二男で本名は介二郎（介・玠は略稱）、室名は無盡藏齋、南畫家・エスペランティストとして活動した。昭和三年四月一日に惺堂の實家である大橋家の養子となったために大橋姓を名乗った。上掲『大橋廉堂先生入蜀畫會』の末には「贊成者芳名竝ニ發起人」として一四名が記されており、この中で中國・朝鮮美術の收藏關係者は次の一九名を確認することができる。

○犬養木堂 河井仙郎 ○山本二峰 ○長尾雨山 ○藤井善助 杉溪六橋
山岡千太郎 ○内藤湖南 山本竟山 ○阿部房二（次）郎 田邊碧堂 柚
木玉邨 高島菊次郎 藤原銀次郎 ○原田庄左衛門 荻原安之助 井上恆
一守尾保太郎 橋本辰二郎

特に○を附した人物は「犬養毅を中心とする收藏集團」のメンバーであり、この畫會がこの收藏集團の全面的な協力を得て開催されたこと見られ、このことは畫會に合わせて刊行された『廉堂入蜀畫譜』（博

文堂、一九三二）からも窺うことができる。鐵硯の外題、木堂・湖南・雨山の題辭、惺堂の跋文があり、發行所に博文堂が名を列ねているからである。湖南の題辭執筆の經緯に關しては、湖南宛惺堂書簡（昭和五年三月一九日、關西大學圖書館藏）に、

……就而ハ畫譜二つき種々御配慮相願由 御多忙中恐縮ニ御坐候へ共後進の爲め宜敷相願上度 猶委細ハ博文堂老人より可申上候へ共不取敢御懇意小生よりも申上候 先は得貴意度如此

とあり、ここでも題辭の依頼の委細は博文堂を介して行われている。ゆえに、この畫會は「犬養木堂を中心とする收藏集團」の全面的な協力を得て開催され、博文堂が中心となり『廉堂入蜀畫譜』が編纂され、それに掲載する湖南の題辭の依頼には博文堂が介在していることが判明した。

したがって、これらの展覽會では共通して博文堂が圖録等を刊行しており、展覽會を取り仕切る事務局的な役割を擔っていたことがわかる。また、「鐵硯先生書畫展觀會」では鐵硯から惺堂への會食の通知を博文堂が擔い、「羊石遺墨展觀會」では文墨洞ギャラリーでの遺墨展の開催を希望する木堂の意向を博文堂が惺堂に伝え、『廉堂入蜀畫譜』掲載の湖南の題辭の依頼も博文堂を通じて行われた。このことは、當該收藏集團では基本的に當事者間での依頼や相談は行われず、博文堂を介して行われたことを示している。

以上の検討によつて「犬養木堂を中心とする收藏集團」の形成と消滅、その特徴について整理しておきたい。この收藏集團は明治四四年四月頃が形成の上限と見られ、少なくとも昭和一四年前後に消滅したものと考えられる。また、この收藏集團の要となる業者の博文堂と惺堂とのやり取りについて「斡旋」「鑑定」「展覽會の開催」の觀點か

ら分析した。その結果、博文堂の中國書畫碑帖の斡旋については、主人及び社員が日頃より惺堂と連絡を密に取り合い、自宅や旅先に關わらず收藏品を斡旋し、時には博文堂の別荘である「松茂山莊」に招待していたことが判明した。また、鑑定においては、惺堂と湖南の例で見たように、鑑定の依頼から實際の鑑定が行われるまでは「收藏家」と「賞鑑家」が直接やり取りはせずに、兩者の間に博文堂が介在していたことが判明した。このことは展覽會の開催にも共通している。つまり、展覽會の會食の通知といった些末なことから、題辭の依頼、ギヤラリーの選定に至るまで、基本的に當事者間での連絡・調整は行われずに、事務局の博文堂が一切を擔っていたからである。その背景には、この收藏集團が收藏にまつわるリスクを事前に回避し、收藏活動を圓滑に行うために、收藏家と賞鑑家の間の連絡・調整の一切を取り行うための事務局の博文堂を置いたことが擧げられる。

三 一 二 大收藏集團の變遷

まず「書苑を中心とする收藏集團」と惺堂の關係を見ておこう。上述のように、惺堂は『書苑』創刊號からコレクション圖版を提供しており、その形成當初から關係が深かったことが知られる。しかし、「ナメタツ事件」(大正八年―九年)で惺堂と澹如の關係が疎遠になり、しかも「クロキン事件」(大正九年)の發生によつてこの集團が消滅してしまつた。その結果、惺堂は收藏活動を圓滑に行うために「犬養木堂を中心とする收藏集團」に傾倒していったものと見られる。

惺堂と「犬養木堂を中心とする收藏集團」との交友關係はいつから見られるのであろうか。まず考えられるのは、木堂が協贊會員、惺堂が發起人として名が見える大正二年に開催された「蘭亭修禊記念會」

である。しかし、どれほどの接點があつたのかは定かではなく、實質的にこの收藏集團との交友關係が深くなつたのは大正中葉頃である。

原田庄左衛門宛犬養木堂書簡(大正七年二月三日)²⁶に、

昨夜澹如「註滑川氏」ノ催にて雨山を招き(玉のや二) 鏡硯欽堂「註黒田(木)氏」惺堂「註菊池氏」碧堂「註田邊氏」二峰「註山本氏」來られ星石「註宗伯爵」ハ祖先の追善ありて缺席せらるる例の如く合作あり欽堂雨山の指頭畫もありて甚面白かりし

とあるように、大正七年の段階において、惺堂は木堂や雨山らと雅會に参加するほど深い親交があつたことが窺われる。また、『美術寫眞畫報』第一卷第八號(博文館、大正九年九月一日)の中國畫特集號には、上掲の雨山に加え、湖南の「清朝季世の代表畫家」が見られる。

ここには顧若波の言及が見えるが、惺堂「顧若波の山水畫」(同誌同號)によれば、當時日本所在の顧若波の畫はほぼ惺堂が手中に収めているとあるため、湖南は論考の執筆にあたりそれを過眼した可能性が高い。ゆえに少なくとも大正九年には惺堂と湖南の深い交友關係が認められよう。このように、惺堂と「犬養木堂を中心とする收藏集團」の關係は、「書苑を中心とする收藏集團」が消滅する以前から形成されてきたことが考えられ、惺堂は徐々にこの收藏集團に傾倒していったものと見られる。惺堂は大正一〇年に『畫中九友集冊』、大正一三年に『寒食帖』と『李公麟瀟湘臥遊圖』を博文堂より刊行しており、これを契機としてこの收藏集團の一員として本格的に活動し、公私ともに親睦を深めるようになる。すなわち、すでに前稿²⁷で指摘したことだが、大正一三年から昭和五年まで惺堂は收藏家の藤井善助らにより京都岡崎に設立された日本共立生命保險株式會社の取締役に就任し、

長男の慧一郎は京都大學や龍谷大學で講師となり、『菊池惺堂日記』によると昭和六年四月二三日以前に辭任)、二男の大橋廉堂は昭和七年末より京都に移住し南畫家として活動したからである。

つづいて、第二期に中國書畫碑帖が日本へ流入し、どのようにしてコレクションが形成されたのかという點について検討しておきたい。惺堂の收藏活動や交友關係の検討によつて、大正中葉より「書苑を中心とする收藏集團」から「犬養木堂を中心とする收藏集團」に傾倒していく様子が窺われた。時を同じくして博文堂は東京支店を開設しており、惺堂のような「書苑を中心とする收藏集團」の收藏家を吸収し、販路の擴大を目指したものと見られる。

しかしながら、大正一二年の關東大震災によつて、關東の多くの收藏家が罹災・没落し、惺堂のような關東を基盤とする收藏家には新たに中國書畫碑帖を受け入れるだけの餘力があまりなくなつてしまつた。國華俱樂部編『罹災美術品目錄』(吉川忠志、一九三三)を一覽しても、罹災した收藏家とそのコレクションが多岐にわたつていたことが窺われる。

仙人掌生「骨董界の中心は大阪か京都へ移る」⁽²⁸⁾では、書畫骨董商の平山堂主人・伊藤平藏の言を引用し、この震災によつて骨董界の中心は關西に移ると豫測するが、實際その通りとなる。「犬養木堂を中心とする收藏集團」では日本に流入した中國書畫碑帖の賣却先を罹災していない關西の收藏家に求め、震災後に日本に流入した完顏景賢や顔世清といった中國人收藏家の優良な中國書畫碑帖コレクションを一括して取り扱うこと⁽²⁹⁾で、世界に冠たる關西の中國書畫碑帖コレクションが形成されたのである。

ところで、なぜ「犬養木堂を中心とする收藏集團」が關西の中國書

畫碑帖コレクションを形成するに至つたのであろうか。それは、事務局の博文堂が關東大震災で罹災した關東の收藏家ではなく、關西の收藏家に對して組織的に販路を求めたからに他ならない。また、藤井善助『有郷館記』(私家版、一九二六)に、

……古來東洋文物の世界の文化に貢獻する所極めて深く吾國文化の開發は往昔支那に負ふ所更に深く隨て其文物就中美術を尊重し其光輝を發揚せざるべからず近時支那の國勢紛亂相踵ぎ東洋文化の誇りとすべき寶器名品は滔々として海外に流出す洵に慨歎に餘りあり、予弱冠支那に遊び其文物に親しみしに因り嗜好と研究の念慮年と共に加り歴史ある名器模範とすべき珍什の歐米に舶載し去らるゝを防がんと欲し且つ支那の現狀を觀て坐視するに忍びず自ら微力を顧みず之れを蒐集し漸く積んで室に滿たんとす……館(有郷館)中儲ふるところの銅、石、玉器、佛像、璽印、書畫、文房具、陶、漆器等を陳列し又蒐藏家の出陳を請ひて公衆の觀覽に供し學術研究或は習作に従事する諸君の參考に資せしめんとす

と示されるような、この收藏集團の收藏方針に多くの收藏家が共鳴したことも背景にあらう。すなわち、ここには中國の國勢の混亂によつて、中國書畫碑帖をはじめとする文物が歐米に流出している現狀に對して、中國より益を受けた同じ東洋の日本に残し、また収集したコレクションを祕藏せずに公開し、學術研究や藝術家の參考に供したいという藤井の思いを見ることが出来る。このことは當該收藏集團の他の收藏家とも共通しており、上野理一・阿部房次郎・黒川幸七のコレクションは、その遺志を繼ぎ各々京都國立博物館・大阪市立美術館・黒川古文化研究所に所藏され、一般に公開されている。したがつて、中

國の文物の歐米への流出阻止と収集したコレクションの公開という、この收藏集團の收藏方針に多くの收藏家が共鳴したこともその形成の要因として挙げられよう。

おわりに

本稿では惺堂を起點として、これまでほとんど議論がなされることになかった、辛亥革命から第二次世界大戦終了時までの第二期に中國書畫碑帖が日本へ流入し、いかにしてコレクションが形成されたのかという點について検討した。

その結果、「書苑を中心とする收藏集團」や「犬養木堂を中心とする收藏集團」を中心に第二期の收藏活動が行われ、特に前者の消滅と關東大震災により、後者の事務局である博文堂が關西の收藏家に中國書畫碑帖を斡旋したことで、關西に一大コレクションが形成されたことを明らかにした。

ここで、この結論に至った経緯を詳しく見ておきたい。第一・二章では第二期において收藏に深く関わった「書苑を中心とする收藏集團」と「犬養木堂を中心とする收藏集團」について取り上げ、惺堂の收藏活動を通じて、兩收藏集團がいつ形成され、いつ消滅し、どのような特徴を持っていたのかについて検討した。前者は明治四四年に形成され、「ナメタツ事件」（大正八年・九年）や「クロキン事件」（大正九年）によつて大正九年頃には消滅した。またこの收藏集團は業者が介在せずに賞鑑家と業者（仲買人）が一體となつていた點に特徴があり、結果として如上の二事件によつて消滅したものと見られる。後者の形成は明治四四年四月頃が上限と見られ、少なくとも昭和一四年前後に消滅したものと考えられる。この收藏集團の特徴は、その要となる業者

の博文堂が、收藏家に對しては日頃より連絡を密に取り合い中國書畫碑帖を斡旋した。また收藏にまつわるリスクを事前に回避し、收藏家と賞鑑家の間の連絡・調整を一切擔い、收藏活動を圓滑に行つていたと見られる。

第三章では「書苑を中心とする收藏集團」から「犬養木堂を中心とする收藏集團」へという二大收藏集團の變遷を惺堂の收藏活動によつて跡付け、どのようにして關西を中心に一大中國書畫碑帖コレクションが形成されたのかを論じた。すなわち、大正九年頃に「書苑を中心とする收藏集團」の消滅を受け、惺堂は圓滑に收藏活動を行うために「犬養木堂を中心とする收藏集團」に傾倒したと見られる。またほぼそれと同時にこの收藏團體の事務局であつた博文堂が東京に支店を置き、惺堂ら「書苑を中心とする收藏集團」の收藏家を吸収し、販路擴大を目指していたものと思われる。

しかしながら、大正一二年の關東大震災によつて、關東の多くの收藏家が罹災して没落し、惺堂のような關東を基盤とした收藏家には新たに中國書畫碑帖を受け入れるだけの餘力があまりなくなつてしまつた。その結果として、博文堂はその販路を罹災していない關西の收藏家に求め、震災後に日本に流入した完顏景賢や顔世清といった中國人收藏家の優良な中國書畫碑帖コレクションを一括して取り扱うことで、世界に冠たる關西の中國書畫碑帖コレクションが形成されたのである。また、中國の文物の歐米への流出阻止と収集したコレクションの公開という收藏方針に關西の收藏家が共鳴したこともその形成の要因と言えるだろう。

今後は、惺堂と同じく兩集團と關わりの深かつた山本二峰などにも検討を廣げ、當時の收藏集團の實態をより深く考察し、當該期に日本

が中國より流出した中國書畫碑帖の一大集積地となつた要因の解明に向けて取り組んでゆきたい。

注

- (1) ボストン美術館の収集に關しては、拙稿「民國期における完顏景賢の書畫碑帖の收藏について」(『中國近現代文化研究』一一、二〇一〇、四四―八三頁)、關西中國書畫コレクションに關しては、本文で指摘した『國際シンポジウム報告書 關西中國書畫コレクションの過去と未來』、『中國書畫探訪 關西の收藏家とその名品』参照。
- (2) 惺堂については、拙稿「菊池惺堂とその家系」(『中國近現代文化研究』一五、二〇一四、二八―五〇頁) 参照。
- (3) 菊池隆村氏宅で調査を行った際、全四冊からなる惺堂の日記が偶然発見された。すべて和装本であり、昭和二年一月一日から昭和七年一月二十六日まで記されている。便宜的に『菊池惺堂日記』と名付け、『書法漢學研究』二四、『中國近現代文化研究』二〇、『相模女子大學紀要』八二、『相模國文』四六(いずれも二〇一九刊行)に翻刻を分載した。
- (4) 拙稿「顔世清の來日と中國書畫の日本への將來―顔氏寒木堂書畫展覽會を中心として―」(『中國近現代文化研究』一八、二〇一七、七三―九五頁) 参照。
- (5) 書苑に關しては、高橋利郎『近代日本における書への眼差し―日本書道史形成の軌跡』(思文閣出版、二〇一一、八五―八八頁) 参照。
- (6) 『書畫骨董雜誌』第八八號(一九一五、七五頁)による。
- (7) 『書畫苑』第一卷第一號(一九二〇、頁數未記載)による。
- (8) 『李龍眠』の畫卷に賣る六萬圓事件の真相 川崎が滑川氏に賣渡した瀟湘臥遊圖で大悶着(『讀賣新聞』大正九年二月五日朝刊第五面所收、

ヨミダス歴史館、二〇一五年三月九日、國立國會圖書館で閲覽・印刷)、井土靈山編『書道及畫道』第五卷第一號―第六卷第二號(一九二〇―一九二二)の卷末に掲載された樂天先生「藝苑笑府」に基づく。蓬心生(北川博邦)「菊池惺堂のこと」(『篆刻』第二〇輯、一九八八)に「ナメタン事件」と言及されているのはこの事件を指すのであろう。

- (9) 「珍品そろひ書畫展 廿三日から三日間 美術學校で」(『東京朝日新聞』大正一四年五月二日朝刊第七面所收、閲藏ビジュアル、二〇一七年八月一九日國立國會圖書館で閲覽・印刷)に、「時價三十萬圓と稱せらるゝ菊池氏の蘇東坡寒食帖及李龍眠瀟湘臥遊圖卷は菊池氏が震災當時辛くも持ち出したもの」とある。
- (10) 『書道及畫道』第五卷第一二號(一九二〇、五九―六一頁)による。
- (11) 『東京國立博物館紀要』三七(二〇〇二、七七―八一、一〇八―一一二頁) 参照。
- (12) 欽堂に關しては、黒木矩雄「三代の學者―黒木茂矩・安雄・典雄―」(『斯文』一一六、二〇〇八、二〇―三二頁)、澹如については、柴田光彦「滑川澹如について」(『書學書道史研究』六、一九九六、三七―五七頁)、松村茂樹「滑川澹如記事―吳昌碩和日本文人交流側記」(『大妻女子大學紀要文系』二八、一九九六、九一―一〇二頁) 参照。
- (13) 木堂に關しては、平成二八年二月一九日に開催された書論研究會關東部會一二月例會(六英社(東京都澁谷區)に發表した「犬養毅と中國書畫との關わり」)に基づく。
- (14) 菅野智明「博文堂における中國法書の影印出版について」(『中國近現代文化研究』一六、二〇一五、一四―一五二頁) 参照。
- (15) 『日中國交正常化20周年記念「中國明清名畫展」』(財團法人日中友好會館、一九九二、頁數未記載)による。
- (16) 大橋廉堂「自昭和八年年賀郵便」(大橋家藏)による。小島の名は内

- 藤湖南宛書簡(關西圖書館所藏內藤文庫)にも見える。廉堂はこのほかにも社員として淺田英太郎・近藤威左夫の名も記す。書誌は拙稿「昭和初期における菊池惺堂の收藏ネットワーク―大橋廉堂先生入蜀畫會を中心として―」(『書學書道史研究』二九、二〇一九)参照。
- (17) 原田悟朗によると、松茂山莊には阿部房次郎や富岡鐵齋がよく來訪し、木堂が來阪の時の定宿であったという。前掲注(15)参照。
- (18) 光畑に關しては、前掲注(12)柴田氏論考・松村氏論考、前掲注(16)『自昭和八年年賀郵便』参照。
- (19) 關西大學所藏内藤文庫17・湖南宛書簡二五五九菊池長四郎。書誌は以下の通りである。「封筒」縦二一・三センチ、横八・四センチ。消印は「岐阜」六・六・六「前八一・二」、紙本墨書。「封筒表書」京都府相樂郡瓶原村「内藤湖南先生座下」(封筒裏書)封「岐阜市外長良村後藤別(莊)ニて」菊池長四郎「封書本紙」縦一八・三センチ、横六八・四、紙本墨書。
- (20) 奥付は「大正十二年三月三十日」となっているが、内藤跋から考えて大正一三年の誤記であろう。大阪府立中之島圖書館所藏の博文堂の影印本は刊行されてまもなく納本されるのが一般的であるが、この影印本は大正一三年八月六日に納本されていることも、その傍證となろう。
- (21) このほかに、雨山と比田井天來の題辭も見える。林文昭は中華第一樓主人で木堂と關係が深く收藏家としても知られる。『木堂書簡』(原田庄左衛門、一九三四)参照。
- (22) 『交詢社百年史』(交詢社、一九八三、六四頁)による。
- (23) 畫會の詳細な考察は、前掲注(16)拙稿参照。
- (24) 關西大學所藏内藤文庫17・湖南宛書簡二三八〇菊池長四郎。書誌は以下の通りである。「封筒」縦二〇・五センチ、横八・四センチ。消印は「王子」六・三・一九「后〇一四」、紙本墨書。「封筒表書」京都府相樂郡瓶原字口畑「内藤虎次郎様」坐右「封筒裏書」封「三月十九日 東京市外
- 瀧野川田端五百番菊池長四郎(封書本紙)縦一九八センチ、横一〇四・四センチ、紙本墨書。
- (25) 佚名「蘭亭修禊記念會行事」(『書苑』第二卷第八號、一六頁、一九一三)参照。
- (26) 「澹如主權の雅會」(鷲尾義直編『犬養木堂書簡集』、人文閣、一九四〇、二八五頁)参照。
- (27) 前掲注(2)拙稿参照。
- (28) 『李公麟瀟湘臥遊圖』の奥付に、發行所「博文堂合資會社」、「支店 京市神田區一ツ橋通町十七番地」、「本店 大阪市西區靱上通二丁目十六番地」と記されているので、少なくとも大正一三年の關東震災前には本店と支店を構えていたことが判明している。
- (29) 「藝苑大震災記(二)」(『書畫骨董雜誌』第一八四號、一九三三、一八頁)参照。
- (30) 完顏景賢は前掲注(1)拙稿、顏世清は前掲注(4)拙稿参照。

附記

本稿の執筆に際し、大阪府立中之島圖書館(平成三〇年八月二三・二四日調査)、關西大學圖書館(同年九月二九日調査)、また菊池隆村氏(同年九月二一日調査)、大橋和臣・愛子夫妻(同年九月二四日調査)より資料の御提供及び調査の御協力を得た。記して御禮申し上げたい。本稿はJSPS科研費一七H〇二二九一及び二〇一八(平成三〇)年度特定研究費A(相模女子大學)の成果の一部である。